
なつやのSS短編集

なつや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なつやのSS短編集

【Nコード】

N0879M

【作者名】

なつや

【あらすじ】

思いついても続けるのができなさそうだったり、続ける気が無い作品を短編という形で短く出してみました。

一番の問題はそもそもこれを見てくれる人が居るかどうか…。

感想、評価が貰えると奮起しちゃうと思いますw

とある人物の弟が来ていたようです。(前書き)

Arcadiaさんで「なつつん」名義で投稿している拙作の主人公、石動進いするどうすすむが今回の主人公です。割と最強モノです。一発ネタなので続かない。

とある人物の弟が来ていたようです。

とある世界の片隅で金髪と赤髪の美しい女性2人を連れた見た目高校生ぐらいの青年は憤り、吠えていた。

「ゲイザーの野郎、だましやがったなあ!!」

そう、青年は騙されてこの場に居るのだ。

ファー・ジ・アース（以降FTA）という彼の認識上では現代の地球にそれとなく近いようで異なる現代モノのゲームアニメ小説があった煮の世界から、故郷の世界が見つかったという虚報を信じて世界を渡り、全然違う世界に叩き落とされたのだ。

彼は世界と世界を渡り歩く放浪者であり、なんの因果か不老不死の魔法使いであり剣士でもある『種の限界を突破して成長する事ができる程度の能力』の持ち主であった。

彼の名は石動進^{いすのめしずむ}。今まで渡った世界二つでは片方では生き神様と呼ばれた事もある不老不死の冒険者であり、FTAでは世界の守護者から送り出される執行者^{バシリ}として犯罪者や人外達を震え上がらせたりしおうでなかったり。

そんな彼の目標は実家に帰って両親と兄に生存報告と結婚報告（実は既に子供もいる）をする。

「ススムさま、確認行為を怠るからこうなるのです。反省してください」

金髪のメイド姿の美女が石動の憤りを華麗にスルーして主を窘める。

彼女の名はエクリア。FTAにて世界の守護者たる女神が石動に対して付けた鈴付きの首輪であり、女神の使徒でもある人造人間だ。魔術と戦闘技術に長け、更にはメイドとしても素晴らしい能力を誇

るメイドである。

「まあまあ、これもいつもの事だし諦めよ?」

20代平均女性よりもやや小柄な赤髪の美女はそう言いながらも楽しそうだ。

彼女の名前は石動真紀^{いするまき}、またはマキ・スプリングフィールド・イスルギ。石動の妻にしてFTAでは【紅い翼^{アルハンブラ}】という英雄達のチームに所属した錬金術師であった。後はおまけで転生者であり、前世は石動と同じ高校の委員会（図書委員）の先輩で地味だけど巨乳だったのでバストサイズが大幅ダウンしたのは本人としてはショックだったと言うのはどうでも良い話だ。

一通り青年の主張、もとい叫び終わった石動は落ち着きを取り戻して「さて、これからどうする?」と二人に今後の行動を投げかける。

「折角だから、この世界を観光して回ってみるのはどうかしら? どうせ時間はどれだけかかって大丈夫だし」

「そうですね。ここで観光をしてFTAの皆様へのお土産を持つのも良いのではないでしょうか?」

女性二人の言葉に石動は「そうだな」とうなずく。

実のところ石動は前述のとおり不老不死であるのは言うまでもないのだが、マキに関しても石動の使徒である為、主である石動の影響を強く受けて不老の存在となっているのだ。エクリアもまた自らの主の影響を受けて不老に限りなく近い状態だ。

こういう3人だからこそ、こういう台詞がばんばんと出る。

「んじゃ、まずは人里を探すか」

「はい」

三人が人里を探し始めて2ヶ月。野を駆け山を駆け森を探し回り漸く見つけた人里は……焼け落ちていた。

「酷いわね、コレは……襲撃されてからまだそれほど日にちは経過していなそうだけど」

「村は壊滅だな……折角見つけたのになあ」

家と人が焼かれた臭いしか漂わない場所で三人は肩を落としてため息をつく。

「まだ生存者はいるかもしれません。探しますか？」

エクリアは石動に問いかける。

「一応やっとか」

そんなこんなで救助活動を開始するも死体九割死に体一割という有り様だった。

石動は生存者だけ集めて一纏まりにし、適当な魔法の唱える。

「ワイドヒール
拡大重傷治癒！」

その一言だけで一瞬の内に重傷者達が完全回復する。

「相変わらずチートくさい性能よね、ススムくんの魔法って」

「そうですね、彼という存在そのものがチートな気もありますが……。ついでに言っておきますが、アナタの錬金術の作品もかなりチートだと思います」

「えーっ、でもどれもこれも使い捨てでちょっと微妙じゃない？私としては何度でも使える凄いのを作りたいし」

殆ど全てが使い捨てのマキの作品だがその効果はかなり凄い。凄い物から僅かな時間だけとはいえ時間を巻き戻す時計、一定時間半径五メートル以内の領域のみ魔法の類を完全に無効化する宝玉、若返

りや性格や性別などを変化させる薬などもある。これらはあくまでマキの趣味の産物であり、その殆どが世に明かされる事が無い、明かすべきではない品々だ。

「でも、私達だってエクリアさんみたいな肉体変異系のすんごいのか、神様あのヒトから力借りたりとかってできないよ。私も名目上はススムくんの使徒だけど、恩恵って言えば不老と魔力供給ぐらいだし」石動は別に神様ではなく不老で死んでもどこぞの横スクロールアクションのヒゲオヤジ兄弟や青い人の様に復活する程度の元・普通人間なの。むしろ使徒を作れるだけトンでもないのだが、残念な事にFTAには戦闘力が天元突破して運命などを軽く吹き飛ばしそうな人間が時々居るのでそういう人間と比べれば彼は可愛いものだった。特にFTAの世界の守護者にとっては。

「さて、事情聴取は2人に任せるけど良いか？」

回復魔法を使い、回復した人々の様子を見終えた石動は後ろで雑談に興じていた2人に投げかける。

「分かったわ。子供達からは私が、大人はそっちに任せるわね」
「畏まりました」

二人は役を分けるとそれぞれ聞き込みを開始する。
その間、石動は周辺の警戒を行っていた。

此処は辺境の名も無き開拓者の村。

この村の惨状は最近多発している戦争の脱走兵や敗軍の兵達が野盗となった者達であり、本来彼等を取り締まる筈の軍や領主等は辺境の開拓者の村等の為に戦力を割くことを拒み放置され、最初は若い女達を始め金と食糧。今度は子供達を狙って襲撃してきた。

「と、言う訳らしいわ」

「典型的な盗賊団だなあ」

「……いかがされますか？」

即断即決する石動。彼の思考的に悪党に人権は無い故に。

「当然潰す。禍根は残すべきじゃないしな」

その言葉を聞いていた村人達の反応は微妙なものだった。

当然と言えば当然だろう。

奇跡じみた回復魔法を扱う見慣れない容貌の若者とそれに付き従っている風に見える二人の美女。

それだけで自分たちを蹂躪したヤツらを滅す事ができる筈がないと。

「やめときな、あんた達だけでかなうはずがない！」

中年の女性が3人を呼び止める。

これは決して彼らの身を案じただけではない。彼らが行き、敗れた場合に更なる被害を受ける可能性があったからこそその保身でもある。

「心配後無用！」

「私達は」

「立ちほだかる者が例え神でも魔王でも押し通る！」

マキ、エクリア、石動が順に答える。

その姿を見て不思議な説得力を感じてしまう。

どう考えても大した実力も無さそうな若者三人。だが、その姿にどうしてか人々はまるで勇者か聖者がこの場にいるような錯覚を覚えたのだった。

が、ハッキリ言ってそんなのは錯覚以外の何物でもない。村をでて暫くすると件の盗賊のアジトと思われる野営陣地を発見。そして弱い者イジメを軽く通り越した虐殺の始まりである。

「ヒヤッハー！汚物は消毒だー！！連続射出、ファイヤーボルトオ！」

無数の岩をも爆砕する火炎弾が盗賊と見張り矢倉や柵を粉碎、爆砕、大炎上させる。

「これじゃどっちが悪役なんだか……あ、逃がさないわよ！メガフラム！」

マキはお手製の強化爆弾を投げつけ、裏から逃げようとした盗賊を門ごと完全に吹き飛ばす。

威力だけなら石動の魔法に勝るとも劣らない。

「あのお二方は相変わらず派手好きですね。戦闘は静かにスマートにやる方が好きなのですが……フォルムチェンジ肉体変異・アームブレイド」

見た目が麗人で武器も道具も持たずヤバイ魔法も使わないエクリアに勝ち目と欲目を抱いていたエクリアを囲んだ盗賊達は我が目を疑った。

いきなり美女の右腕が丸々大剣に変化したからだ。

「ひ、ひいいあああっ！？ば、化け物！！」「化け物とは失礼な。

私は少し変わったメイドです」

それだけ言うとエクリアは大剣と化した腕を構え、踏み込み、相手の防御の上から数人巻き込んで豪快な斬撃を繰り出す。

エクリアもエクリアで爆発しないだけでかなり派手だというのは言うまでもなかった。

更に逃げようとする盗賊は今度は左手をスカートの中、脚に付けていたホルスターから拳銃を抜いて照準する。

「一人でも逃すとお思いですか？」

銃声が二度響き、彼女の周辺にいた盗賊は全滅した。

「て、テメエら！人質の命が惜しけりゃ大人しくしやがれ！！」

石動が一方的な蹂躪をしていると大きな声が響き渡る。

いかにも盗賊の親分といった風体の男が女性の首にナイフを当てていた。

「人質？」

「そうだ！コイツの命が惜し」

「そう、関係ないね」

「けりゃ……は？」

「ほいと」

石動は気軽に缶の形をしたそれを投げた。

それは巷ではスタングレネードと呼ばれる非致死性の爆弾だった。

閃光と爆音が盗賊と人質の目と耳を潰した。

「あ、あれは魔王だ。魔王とその下僕が降臨したんだ！」

後にこの事件は無事に逃げ帰った村人達からの事情聴取により魔王が降臨した事件としてこの世界の一部を震撼させる事になるのだが、その頃には当人達は既にF T Aに帰還しており、噂だけが歩きまわら魔王を恐れた国が異世界から勇者召喚の儀式をしたとかしんないとか。

どっちかといえば魔王とその下僕を倒すのが仕事の3人がそう呼ばれるの皮肉以外の何者でもないだろう。

1ヶ月後のとある地方の村の宿にとある冒険者の夫婦が泊まっていた。

アルス・ルクツリアとマリー・ルクツリアの二人だ。

今二人はギルドからの依頼で三国の主要街道付近の魔物の分布調査を終えて帰る途中の村の宿で食事をしているところだった。

「……って感じで魔王が遥か西の国に現れたそうよアルス」

「眉唾だろ、どう考えても。そもそも異世界から勇者召喚ってなんだよ」

「だよなー」

伝えた本人も欠片も信じてはいない。

そもそも魔王など童話か小説か詩人の唄ぐらいにしか出てこないものだ。

そんなものが実在すれば今頃国の一つ二つ滅んでいるだろう。

更に異世界からの勇者召喚とか「なにそれ」である。

態々そんなモノを呼ばなくても魔獣や魔族の相手をする分には十分人間はやっていけている。

「それよりもマリー、明日は久しぶりに街だ。今の内にヴァンに伝えておく近隣の魔獣調査の内容再確認するぞ」

「あーもう面倒だわ。勝手に報告書作ってくれる魔法ってないのかしら」

この話は、石動涼がこの世界に訪れる役1週間ほど前のことであった。

とある人物の弟が来ていたようです。（後書き）

弟と兄貴がリンクしているけど欠片もすれ違わないという、ただそれだけの話。

弟は理想郷の拙作を見ていただければわかりますが、異世界（E10naというフリーゲームの世界）でプレイヤーががんばって育て上げた強キャラ並の仕様なのでかなり俺TUEEEE！です。

マキはネギまに転生したナギの妹で魔法使いというよりは〇〇のアトリエ系の錬金術師で道具作成チートです。エクリアはナイトウィザードのアンゼロットが作った人造人間でアンゼロットの使徒となっていてこちらは普通に強いだけです。

無限な航路と鋼鉄の英雄たち (前書き)

タイトルどおり無限航路が含まれる作品です。
他にもマクロスやスパロボZも含まれたらよかったなと思ったり。
続かないかもなんでこっちでのつげとく。

無限な航路と鋼鉄の英雄たち

ある時、ある世界で大きな戦いがあった。

地球の衛星軌道上に存在するオービタルリングという地球を囲む土星の環のような衛星施設と地上を結ぶ軌道エレベータが騒動の原因となる戦いだ。

その戦いにおいて窮地に追い詰められた一人の青年がとある兵器を使用した事により、世界と世界の境界が衝突し、混ぜ合わさり、惑星レベルどころではなく、銀河系レベルですらなく、次元レベルの騒動となったのだ。

そして、何の関係も無いはずだったとある青年もまたその騒動に飲み込まれ銀河を股に掛け、更には次元をも超える戦いに巻き込まれた……のかもしれない。

多次元世紀3年 8月16日。

「やっぱり、今回もダメか」

はあっ……と憂鬱気なため息をついて青年は馴染みの公園の座り慣れたベンチの上に腰を落す。

彼の名前は渡徹^{わたりとおる}21歳、住所不定無職^{ホームレス}。

「世界がこうなってから丸で良い事がありやしない」

こうなった、と言うのは俗に言う『ブレイクワールド』と呼ばれる事件、事故が発端だ。

その影響によって彼は本来住む世界から巨大な人型兵器やら宇宙戦艦やら人外の化け物やら超科学を持つ宇宙人や未来人が跋扈するこのトンデモない世界に放り込まれ、ただの高校生がいきなり無職でニートと言う状態に陥ったのだ。

それでも生きて来れたのは彼と同じ状況に陥った後のホームレス仲間（と言っても元軍人）が割りと多かった事によるだろう。

彼らの半ばお遊び間隔での訓練兵扱いや下士官向けの座学でサバイバル技術と軍事技術や知識を教えられ、最低限の生活必須装備サバイバルグッズを分けてもらえたからだ。

その彼らも今では職に就いて、そして散っていった。

最初は軍に運よく入れた彼らに善意で誘われたが謎の悪寒がして深い礼を述べつつも辞退。

数週間後には鋼鉄の英雄たちによって撃破されその殆どが死亡しこの世を去ってしまった。

葬儀は軍による合同葬のみ。無いよりはマシだが異様な空しさを覚えた。

「普通に働いて、普通の住居を得て、普通の生活をしよう」

そう決意して社会復帰を目指すも高校中退（しかもこの世界に存在しない高校）、住所不定無職、人相が悪い（顔や体の至る所に目立つ傷痕有り）という彼を受け入れてくれる普通の会社は中々に存在しなかった。

もう諦めて一生ホームレスでやっていくか？等と考えながらぐでーっとベンチの背もたれにだらしくもたれかかり、目線がベンチの後ろに行った所で何故か10センチ四方の四角い物体が目に入った。そして同時にそれに強く関心を持った。

「なんじゃろ、これ？」

触れて、持ち上げて、様々な角度からそれを見る。

しかしそれだけで分かったのはただの四角い物体、という感想だけだ。

そう、次の瞬間に何も起きなければただの箱のままだっただろう…。

「っ！！」

突然強烈な光を放ちながら箱が展開していく。

そして強烈な光が同時に自身の何かを書き換えようとしているように感じた。何故そう感じたのかは本当に分からないが確かにそう感じたのだ。

「な、なんだってえんだよっ！！ホームレス舐めんなよ！！」

その時の彼は既にやけっぱちだった。妙なハイテンションに身を任せ、自分を侵食するナニカを逆に侵食してやる！そもそなんで俺がこんな目に遭わなければならない？誰のせいだ？誰のせいでも良い、俺が、俺が生きるためのチカラを寄越しやがれ！！等と奇声を上げながら思考していた。

突然に意識が高揚しなんでも出来るような気さえする全能感を感じた。

もう何がなんだか訳が分からないが、とにかく俺の要求を全て叩き付けてやる！

「俺だけの最高の艦隊に俺をサポートしてくれる相棒！仲間！後カッコいいロボット！後はチートな技能とかスゴイ能力とか皆寄越せ！」

叫びながら目の前に現れた謎の画面に何故か俺の情報が開示された。ゲームのステータス画面のようにも見える。

なら、コレを改竄するしかない。

ゲームっぽく特殊技能を全所持で所持金は最大値（9,999,999,999,999,999,999）更にアニメやゲームに出てきたロボット……ええとそうだ！アレが欲しい！SMSのマクロス・クォーターが！俺の知識から異世界へ干渉！データダウンロード！実体化！……ん？何だよ邪魔するなよ！アッチにいけよ！

腕を強く振るうと何時の間にか近づいていたなんか変なのはバラバラに碎けて散った。

さて、俺がすべきことは後は何じゃろか？
うーん、思いつかない。

まあ良いや、取り敢えずはこんなもんでー

……

……

…

Side ????

「観測対象EXTーw01ノ情報書キ換エニ異常発生」

「干涉逆流コノママデハ侵食ノ恐レアリ」

「ガガ……侵食汚染率5%」

「ワールドリンクージ発生」

「EXTーw01ニ抛ルデータ改竄発生、阻止セヨ」

「……改竄阻止失敗、情報改竄ヲ確認 修正不可」

「情報実体化、完了ヲ確認……」

「危険、EXTーw01ノ排除ヲ提案」

「排除要求、賛成多数」

「次元干渉型管理生命体ノ派遣ヲ提案」
アインストレージセイア

「賛成多数、承認」

「現在地デノ排除活動ハ他ヘノ影響ガ甚大。実行場所ノ変更ヲ提案」

「賛成多数、承認」

「経過ヲ待ち、次ニ現在進行中ノ『ワールドクロスオーバープラン』
ノ次段階ヘノ進行ニ関シ……」

「……………」

「……」

Side Out

気が付いたら俺はどうやら寝ていたようだ。

見知らぬどこぞの屋内で。

しかも、ベッドの上で。

まともなベッドとか3年ぶりだな。今までは新聞紙とかダンボールのベッドだったし。

辺りを見回すと清潔な感じの部屋だ。

いや、本気で……

「ここ、どこだ?？」

意識が落ちる前の場所と違う上に、俺の着ている服はいつもの檻樓となったブレザーの制服ではなく清潔な……ええっと病院とかで患者が手術受ける患者が着てるっぽい貫頭衣とか言う奴だっけ?それだ。多分。

とにかく何が起きたのかまったくワカラン。誰か説明してくれ。

そう思っていると部屋のドアがプシューという機械音と共に開き、女性が入ってきた。

「おはようございます、艦長」

「ええっとおはよう?」

取り敢えず疑問形で返す。

「私はN・A・V・I・型アンドロイド1号機です。本艦のアンドロイドの人事統括及び艦長の補佐を行うのが業務となっています」

「ナビ型アンドロイド? アンドロイドって言う人間そっくりのロボットだったか?」

疑問を口にして問うと彼女は首肯してから返事を返す。

「その通りです。一女性型ナビゲーションインターフェイス(Navigation・Anim・Virgo・Interface、略称N・A・V・I・であり、私はその一号機となります」

淡々と告げるN・A・V・I・一号機にどうしたもんかと思いつつも次の問いを口にした

「ここは？ホンカンとか言ってたけど」

「本艦は可変攻撃宇宙空母（VACC）と呼ばれるタイプです。正式な型番は不明となっています。また艦銘はありませんので艦長が名付けて下さい」

「可変攻撃宇宙空母型？？」

どこかで聞いたことのある言葉に驚きながらも尋ねる。

「コチラのモニタをご覧ください」

そう言ってベッドの横にあったらしいモニタの灯りがつき、彼女の操作で一つの戦艦と一つの巨神を思わせるシルエットが表示された。すんごく見覚えがあります。ぶっちゃけマクロスオーターやん。

「攻撃空母形態時は全長402m全幅112m全高84m 強行形態時は人型で全長78m、全幅124m、全高402mとなります。また艦を分離することで5隻の戦艦、空母になります。各艦ともに宙間、大気圏内、水中での活動及びフォールド航法が可能です。サイズと性能を考えれば高性能艦ではありますが、合体時と比較すれば出力低下、火力低下は否めません」

ちなみに現在ディスプレイには同体の艦と両手と背中の砲台が分離して艦になった姿が表示されている。

砲台が砲撃艦、右腕が巡洋艦、左腕が空母、本体が巡洋艦と言ったところだろうか？

分離状態でもそれぞれの全長が200m級で本体はやっぱり400mだ。だが、手と背中の砲台がなくなったので速さはとんでもないだろう。

アニメじゃ分離とかしなかったからそんな設定知らなかったんだが、本当すげえー。

「すっげえ……とんでもない船だな、これ」

「お褒めに預かり光栄です。続いて艦載機について説明します」

つらつらと説明されて覚え切れなかったんでようやくだけすると、

空母の方の最大の艦載数が90機。

現在の艦載機はバルキリータイプがVF-25メサイア24機（うち指揮官機が4機）、VF-19Aエクスカリバー12機（指揮官機が2機）、VF-22Sシュトゥルムフォーゲル？12機（指揮官機が2機）。防衛用重攻撃型、つまりはデストロイドがVB-6ケーニッヒ・モンスターが32機と合計80機らしい。

その全ては現在の所必要最低限の人員（各艦の統括でN・A・V・I・型が1体ずつ、医療用と艦内保全用に1体ずつの7体それ以外はドロイドというこの辺りで使用されている作業用アンドロイドが船員の代わり）を配置してある。

また、艦載機に関してはデストロイドは艦のFCSで管理して空母に固定した状態で砲台代わりに使用できるが、バルキリーは有人操作以外は不可能とのこと。

館内モジュールなどを見る限りでは完全に『マイクロン向け』となっており、ゼントラーディ用の施設などは一切存在せず、その代わりに本体の艦には居住エリアや娯楽施設、空母の方は貨物室や格納庫が多めに見えた。

基本は合体状態で航行するのがメインで敵の目を欺く、或いはアステロイドベルトに入る時や作戦に応じてバラけて動きやすくするそうだ。

なるほど、ゼントラン関連設備が無くなって完全にマイクロン向けになった以外はほぼマクロスFに出てくる軍事会社SMSのマクロスオーターと同じだな。……軍事会社でよかったっけ？まあ良いや。

「とりあえず、艦に関する事は理解したよ。俺が艦長ってなるけど……それは何でだ？」

「不明です。私たちのメモリーにトオル・ワタリが本艦の最高責任者であるただけ設定されています」

それが何故かを知りたいのだけど、と思いつつもなんだか堂々巡り

の気がするので話を進める事にした。

「艦長って何をすれば良い？」

「行動指針を立て、クルーに指示を出す、クルーの士気を鼓舞するのが艦長の役目です。難しく考えなくとも艦長としてキチンとしていればクルーは貴方を支持しついてくるでしょう。ですが、艦長としてやってはならない事を繰り返すようではクルーはついてこないでしょう」

私たち N・A・V・I は別ですが、と言いつつ含めながら告げる。

「なるほど……。分かった、未熟者だけど宜しく頼むよ」

「はい、万事我々 N・A・V・I にお任せください」

と、N・A・V・I が無表情のまま言う。やっぱりアンドロイドだからだろうか表情が無い。

さて、艦内の医務室からでて艦長室で暮らすようになって1週間があつという間に経過した。

その間に俺は簡単に艦長としての講習を受けていた。主に指示の出し方と心構え。機材の取り扱いや物資に関する事。判断の際に重要な事。シュミレーターによる艦のみの対艦隊戦。艦載機を用いた対艦隊戦。敵艦載機を含めた総力戦などだ。

一番大事だったのは戦闘よりも艦長としての指示の出し方や心構えだったのは言うまでもないだろう。

戦闘なんて正直な話、N・A・V・I 達の判断に任せてしまうのもアリなのだ。

まあ、そんな感じで指導を受けてついに最初の指示を出す事になった。

「メインジェネレーター起動！本艦の最大目標は『地球』への帰還だ！それを目指し出航する！機関微速前進！」

「ジェネレーター起動。機関微速前進。最終目的は地球への帰還、いくぞ！」

N・A・V・I が復唱してドロイド達に指示を下す。

とまあ、こんな感じで旅立ったのは良いのだが……残念な事に航宙図は真っ白でどこに行けば良いか判らないので一番最初の目標は補給可能な場所を見つける、ということだ。

さて、ここいらでN・A・V・I・達に関しても突っ込んでいくべきだろう。

N・A・V・I・達は一号機が自分で言っていたように女性型ナビゲーションインターフェイスだ。詰まる所俺のフォローをメインに艦内でドロイド達の指揮を取る存在だ。

で、ココが重要なのだが全員が有機ボディ……人間にそっくりな肉体を持つそう。詳しい説明は良くわからなかったが、人造人間って感じが正しいようだ。ただし、人間に似てはいるが人間と比べはるかに頑丈で能力も高いらしく食事も必要であればトイレや風呂にも入るとのことだ。

詰まり、見た目もする事も人間と変わらないので人間と扱いは変わらないそう。

他にクルーが入った際の俺と彼女たちの関係は飛び出した金持ちのボンボンと警護の為に親元から派遣された侍従兼ボディガードとなるらしい。

……そう言われて非常に情けない気分になったのはココだけの話だ。

で、その際の彼女たちの艦内での所属と呼称が……

1号機、センター艦統括 副艦長 ハル・セラル（金髪ポニテで均整の取れたスタイル）

2号機、ARM-D-Rガンシップ艦統括 航海士 サンディ・アルム（茶髪で見た目姉御肌）

3号機、ARM-D-Lキャリアー艦統括 操舵士 エルミイ・アルム（サンディを幼く大人しくした感じなので妹って事にした）

4号機、BASTER-R砲撃艦統括 砲雷長 フミ・ミギカタ（

和風黒髪三つ網ロングでやや背が低いツルペターン)

5号機、B A S T E R — L 砲撃艦統括　レーダー管制長　テレサ・バステル(ウェーブの掛かった白髪ロング、スタイル良い)

6号機、生活班兼保安班長　レン・フェイ(なんとなくみため中華っぽいお姉さん)

7号機、機関班兼整備班長　ナミコ・タカハラ(豪快でマツシブな少女…? 逆セクハラ反対)

でだ。

彼女たち其々に会ってから知ったのだけど、彼女たちにはしっかりと個性があった。

まずハルは冷静沈着で一見すると超クールだけど彼女たちの中では長姉らしく面倒見も良く甘い物好きのみんなのリーダー格でオペレーターとして能力が高く、俺の秘書的な立場でもある。戦艦だから副長とか参謀長と思えばいいのかな?

サンディは気風がよくハッピートリガーかと思えば必要ときに必要なだけ射撃するプロ気質の姉御でエルミイと仲が良い。

エルミイはサンディを姉のように慕い、空母を担当するだけあって管制能力が高く対空防御やカタパルトを用いた防御が上手い……が、やたらとアームドアタックをしたがる悪癖がある。

フミは大和撫子といった感じの和風美人でお淑やか。だけど砲撃戦は一撃必殺狙いパワー重視な感じ。テレサとのコンビネーションでスゴイ戦果。

テレサはカッコイイ系の宝塚に居そうな女性だ。砲撃は殲滅よりも相手の誘導を重視するようでお陰で誘導された敵がサンディの弾幕やフミの砲撃で纏めて散るシーンが多い、何気にフォロー体質。

レンは中国系美人って感じの女性だ。綺麗好きの料理好きで更に腕っ節も強いと言うある意味完璧超人。一番包容力があるかもしれない。

ナミコは自称「少女」のマツシブガール。セクハラ大好きな上に俺

にまで逆セクハラ。ただし快活で明朗、やり過ぎない性格なので憎めない感じだ。艦内の整備や機関の整備を一手に引き受けるメカのプロだ。

うん、まあ大体こんな感じだ。で、次に艦内のことについて、かな。先ず始めにセンター艦であるセンター・ハル。

強襲形態時は胴体と脚になる部分で一番平均的な能力を持つが火力が足りない艦だともいえる。

居住モジュールが他より大きく娯楽モジュールの映画館や男女別シヤワールーム、食堂、会議室兼休憩室、訓練施設等もある。

聞いた話だと合体時の最大収容人数は7000人ぐらいまではがんばれるらしい。食事制限や節水が掛かるらしいけど。

常時は4000人ぐらいが良いところだそうだ。もともと、この艦はオートメイションが進んでいるので最低稼動は艦載機込みで600人程度でやれるらしい。

ガンシップは対艦砲や主砲であるバスターキャノンを持つ一番の火力艦だ。実弾も多いので少々節約を心がけないと補給の時に泣きを見るらしい。もともとはどの艦も同じらしいが。内装モジュールは武器系統を除いて整備と艦内警備人員用居住モジュールと食堂と購買。簡易シヤワールーム、後は他よりも火器管制系が強いそう

だ。
キャリアーは対空火器と格納庫と整備ブロックで大半を占めており、艦載機パイロットと整備員の居住ブロックが多く後は食堂とブリールディングルーム、対空管制と艦載機との通信の強化、滑走路兼シールドの装甲強化がされているそうだ。

砲撃艦の二艦はどちらもレーダーと索敵強化がされており、実はレーダー艦も兼任している。こちらにも居住ブロックはキッチンとあり、ガンシップとキャリアーよりは居住性が良い。

で、普段は合体状態で航行と戦闘を行うので態々バラける時以外は

センター艦のブリッジでこのマクロスの運営が行われる。

「艦長、レーダーに感ありです。近隣の惑星付近で小型艇が中規模駆逐艦3隻に攻撃されている模様です」

フミからの報告に少し驚きつつ問い返す。

「フネが……？ってことは補給も取れる可能性が見えたな。いや、それよりもその4隻の状況は？」

「あ、今小型艇が！！正面モニターに映像を回します！」

その言葉と共に近隣の惑星に墜落する小型艇の姿が見えた。

「……遅かったか」

発見から墜落まで実に15秒。助けるの無理だろコレ。

そう思っていると今度はエルミィからの報告だ。

「小型艇を攻撃していた三隻より通信、どうしますかあ？」

「通信を繋いでくれ。……こちらマクロスクォーター級艦長トオル・ワタリだ。用件は何でしょう？」

『こちらはロウズ守備艦隊だ。その正体不明艦！速やかに停止しロウズ領を立ち去ってもらおう！』

「……失礼、実はこちらの航路等のデータが事故でふっとんでしまっているんだ。できればこの辺りの航路を教えて貰いたい。それさえ可能ならば直ぐにでも立ち去ろう」

『……よからう。こちらこそちらのような重武装艦とはやりあいたくないからな。データを送る』

そう言っただけモニターの向こうの相手は誰かに目配せをした。

「わかった、そちらの善意に感謝す——」

「艦長！駆逐艦のエネルギー反応増大！」

俺が感謝を続けている最中にテレサからの警告が届く。

エネルギーが増大って、まさか！！

『今だ、ツテー！！』

「なっ！！」

そのまさかだった。

驚いている隙にレーザーが幾条もコチラに迫った。

「全艦緊急回避機動！！左舷スラスタを全開！」

「ピンポイントバリア、艦前方に展開だよ！」

次の瞬間、艦が緊急回避を行い、同時にピンポイントバリアで当たりそうなレーザーを弾く。

その姿に安心を覚えた俺は冷静さを取り戻し、即座に指示を出す。

「ハル！前進しつつ応戦だ！！サンディは先頭艦を狙え！フミは右の、テレサは左のを担当しろ！無駄弾は撃つなよ！エルミィは引き続き防御を頼む！」

「「「了解！！」」」

一端反撃に出るとそこからは一方的だった。

本家マクロスのクォーター4分の1であるマクロスクォーターといえど、その分機動力が強化され、火力も見た目以上に強いこの艦は瞬く間に3艦とも爆散させた。

「熱量消失、周辺に反応なし！」

「本艦は警戒態勢を維持しつつ、レンとナミコに救助活動と敵艦の残骸回収を指示してくれ。活動にはバルキリーの使用を許可する」
「了解」

そうして待つ事30分。艦長席でコーヒーを飲みながら待っていると、救助とジャンク回収を終えた二人から通信が届いた。

「二人ともお疲れさん。救助した奴らから代表を一人コッチまで引っ張ってきて、話を聞くから」

『アア、だったらそれはアタイがやっておこうか、艦長？』

俺の言葉にナミコが即座に反応した。

「ん、疲れるんじゃないか？」

『ハッハッハ、アタシはこの程度で疲れるほどヤワじゃないよ！それに艦長はまだ経験が浅いだろう？今回は見学してナ！』

「そうか、悪い。それじゃあ頼むわ」

自信満々のナミコに俺は任せる事にして見学しようと思ったが、正直その判断を後悔していた。

まあ、端的に纏めるなら……。

「うりうり、ココが良いのか？ココが弱いんだろ？」

「アッ——！！！」

って感じで子供には見せられないよ！な尋問でした。俺も気分が悪くなったので途中で逃げ…もとい抜け出した。

で、尋問の結果分かったのがこの辺りは小マゼランのロウズ宙域というらしく、ロウズを統治するデラコンダという人物により航宙制限が掛かっており不法侵入者には容赦しないそうだ。また、ロウズの人間は星に止まり開拓に力を入れよ！と言うのがこの辺りのルールらしい。

「まあ、統治者としてはアリだよな。縛り付けるのは良くないけど星が豊かになればそれだけ住人たちも良い暮らしが出来るだろうし……下手に宇宙海賊が増えるより全然良い」

「けどよ、若い奴等はソレが嫌で抜け出るのも多いそうだってさ、艦長」

ナミコがそう言って肩を竦める。

「どれが良くて何が悪いかは人其々だ。俺達が口出しする事じゃないな」

そうやって話していると、ハルから報告が入った。

『敵艦のコンピュータから航路と航宙図のデータを吸出し完了です。データベースへの反映、完了しました』

「よし、それじゃあ先ずは近隣に宇宙港があるんだろう？そこに向かおう」

『了解、ロウズだと面倒があるかもしれませんが。バッジヨという惑星の衛星宇宙航に向けて発進します』

「ん、後は任せる」

トオル・ワタリ 男性21歳
所属 マクロス・クォーター
役職 艦長
特殊技能
指揮LV1
ラッキー
精神
不屈 根性

If もしも彼が辿りついた世界が……学園黙示録編（前書き）

拙作の主人公達が辿りついた先の世界がファンタジーではなく学園黙示録だった場合。

形式は三人称視点で進みます。

一人称だと自分を表すのが全部「俺」で紛らわしいので。思いついたただけなので、基本は投げっぱなしジャーマン。

If もしも彼が辿りついた世界が……学園黙示録編

C a s e 1. R y o u - I s u r u g i

彼はふと気が付いたら閑静な住宅街の路地に居た。

「ここは……どこだ?？」

見覚えの無い路地、見覚えの無い街並み。

○チガイのコスプレ女に延々と意味不明なことを言われて気が突いたら知らない場所、としか彼は認識できなかった。

彼の手荷物は”無限”と”∞”がびっしり裏地に書かれたバンダナと昔ハマったゲームに出てきたハンドヘルドコンピュータ、そして明らかに銃刀法違反ななにやらゴージャスな感じの長剣だ。

「とりあえず、これは人目のつかない場所に……」

捨てよう、と口にしようとした所で絹を引き裂くような甲高く、非常に耳障りな悲鳴が聞こえた。

「……どこのお約束だ、畜生」

これが小説なら声の先には強盗なり強姦魔なりの悪漢が居る事だろう。

涼はそんなオヤクソクを想像して、その次に聞こえ、そして目に入った光景に度肝を抜かれることになる。

グツチャグツチャと租借する音。ビチャビチャと滴れる音、かひゅーかひゅーと目を剥き壮絶な表情で声なき悲鳴を上げ空気を漏らす中年の女性。

その光景を作ったのは……。

「……っ！？（なんなんだ、これは！？丸でゲームか漫画みたいな状況じゃないかっ！？！！）」

錯乱し、思わず声を上げそうになりつつも涼は”ソレ”を見た。

一見すれば間違いなく人間だ。

そう、一見すればだ。

だがしっかりと見れば”ソレ”を人間と定義していいか不明だ。

少なくとも、生きた人間、更には日本人であれば食人は禁忌だし殺人だってアウトだ。

更に”明らかに致命傷を負っていて既に死んでいても可笑しくない人間が人一人を完全に押さえ込んで喰らいついている”というのはどんなホラー映画だとしか言い様が無い。

そこまで考えが巡った所で次に彼自身の行動選択肢を選ぶことになる。

逃げるか、助けるか、だ。

助けるにしたって食いつかれた女性明らかに手遅れだが……。

「……っああああああっ！！！」

涼自身に剣の扱いに経験は無い。だが、それでも基礎の基礎的な扱いの知識はあるつもりだった。

剣筋に対して刃を真っ直ぐに振りぬくこと。

にわか知識ではあるがそれほど間違いではなかった。

横一文字の一閃。

ソレは涼自身が驚いてしまう程に綺麗な一閃であり、そして素人故の過ちとでも言うべきか、間合いを計り損ねて助けようとした相手ごとあっさりと切り裂いてしまった。

ぽーんと擬音が付いてしまったようにソレと女性の頭と顔の上半分が飛んで転がった。

その事実になんとか分からなくなりそうになりつつも、更に混乱し錯乱しそうになりつつも持ち前の自制心で自らの感情をフラットにさせてゆく。

「……一体、何が何だっと言うんだ」

その後、恐怖心に押しつぶされない様に自己暗示をしつつ何度も遭遇した”ソレ”の頸を空恐ろしいほどに切れ味の良い長剣で跳ね飛ばしながら路地を進んで彼は元の場所では決して世話になることのないであろう”右翼団体”に拾われて世話になる事になった。戦力を提供する代わりに水と食料を得ると言う条件で。

RYOU—ISURUGI ALIVED.

Case2. Yoshihiro Kamada

佳佑が気が付いた時に呟いた言葉はただ一つだった「変なユメみたなァ」の一言だった。

何せ部屋の電気もガスも水道も止まっていない。いつも道理のアパートのマイルーム。

去年買い換えたばかりの30インチの新品の液晶TVもキッチンと動いて暑苦しい顔した初老男をメインのニュースを写している。

「やっぱ、ユメだったk……はいい？」

自分の逞しい妄想力と中二病溢れる心が生み出したユメだったのだと昨晚であったコスプレ女やその後の遣り取りを忘却しようとした所で偶然にも”ソレ”に気付いた。

「にせん……ななねんですと？」

なんとなくネタっぽくジョジョ立ちまでかましてしまう辺りは彼がそういうネタ好きだからに他ならない。

とはいえ、今の彼が気にすべき所はそこではない。

「2007年っつーと……普通に数年前ってレベルですがな。ナニコレ、タイムトラベル？」

無い頭を絞ろうとしたが元々そこまで頭の巡りが良い訳ではない。考えても答えは出ないとさっさと思考放棄して携帯を手に取りとりあえず勤め先を仮病で休もうと思って携帯から会社と勤め先にメールを飛ばし、腹が減ったので朝食をとることにした。

ちなみに、ニュースはBGM程度に付けっぱなしにされていたが、完全にスルーされて内容なんてちっとも彼の脳みそに記録されなかった。

その後、そういえば買い置きのお惣菜が無かったなーと思ってコンビニに行こうとしてアパートを出た所で彼の体は見事にフリーズ。

「扉を潜った先は、見知らぬ街並みでした……ってなんのネット小説？」

中々メタな事を言ったような気がするがソレは気のせいだ、何故ならただ単に彼がそういうネット小説をしょっちゅう読み漁ってるだけだからだ。

ソレはさておいて佳佑は少し悩んだ。まったく見知らぬ街並み、少なくともソレが日本であると言う確信はあった。主に電柱とか広告とかお隣の部屋の表札の文字を読んだお陰で。

「まあ、日本ならお金は一緒だろうしそこまで悩むことは無いか、コンビニでも探すべー」

困った時は下手に考えずに取り合えず目下の目標を目指す。ソレが彼のパターン。

単純に考え無しとも言う。

愛用のPSPをMP3プレイヤー代わりにしてJAMプロジェクトのアツイ歌を聴きながら歩く。

そして幸運にもそれほど迷う事無くコンビニに辿りつく。

「さて、何を買うかな。レトルト類はカレーはもう大分飽きてきたから他のが良いんだけどな……」

そう佳佑が考えている所でコンビニに新しく客が入ってきた。

「いらっしやーせー」

やる気の無い女性店員の声が聞こえる。

佳佑は籠に適当にレトルトと惣菜を突っ込んで次にドリンクコーナーに向かう。

その間に他のお客が入ってきたが関係ないと思ってスルー。

「ちょ、お客さんレジの中まで……え、なに？ ひ、いやぎゃあああああああああああ……！！！」

そして、遂に異変に気が付かされた。

「……っ！……！！！」

突然の悲鳴に心臓を鷲掴みにされた気がしつとも即座にレジの方へ振り返りソレを見た。

”ヒト”が人を喰らう瞬間を。

「い！？ぎっ？！たひゅけへっ！！」

その女性店員の目は明らかに佳佑を見ていた。

だが、当の本人は完全にビビっていた。完璧に、完膚なきまでにビビっていた。

嫌だ、無理だ。思わず涙目で視線だけで答える。

逃げなきゃ、そう思っで一瞬視線が外に向いて絶望した。外には更なる惨劇の舞台がまっていたから。

買い物籠が脱力した手から離れる。

重力に引かれた買い物籠が嫌に大きな音を立てた。

コンビニの中にはいつの間にか人であって”ヒト”では無い奴等で埋め尽くされていた。

「あ、はは……あははは」

既に取り囲まれている。腕が捕まれた、目の前のやつは大きく口を開いて——……そこから先の記憶は彼には残されていない。

ただ、気が付いたら彼はアパートの自分の部屋に居た。起きた時間だけが先ほどとは違っていた。

「は、ははっ……なんて悪夢だよ」

付けっぱなしの液晶テレビは、非常にも”奴ら”を映し出しそれがただの悪夢ではないことを佳佑に告げていた。

Y o s h i h i r o - k a m a d a A L I V E D . . . ?

C a s e 3 . S u s u m u - I s u r u g i

半年程前にイルヴァから転移してきた進は平和なこの世界での日々満足していた。

「ああ、日々の平穏がここまで素晴らしいモンだったとはっ!!」
平和をかみ締めて目立つアクションをしている進を見て変人を見る目で見ている美少女が言い放つ。

「ススム、アンタ目立つからそういうのやめなさいよ!」

「っと、こりゃ失礼したなお嬢」

「ソレもヤメテ。ったく、なんでアタシがアンタなんかと……」
とても嫌そうに言う美少女に進は僅かに苦笑しつつ答える。

「そりゃ、お嬢が俺の監視役で俺はお嬢の護衛だからでしょ」

そう、二人の関係は監視役と護衛。何故監視するのかと言えば異様に高い戦闘技能を持つ石動進がこの世界に転移してきたばかりの頃にとある夫婦とその部下がその夫婦の家の庭先で遭遇。

「どこのカチコミじゃー!」

「ちょ、待てよ?!」

以下略で戦闘に至り、取り合えず殺さない程度に相手の部下や夫婦の夫との戦闘をこなして漸く一息ついたところで何とか話し合いの場を設けられた。

本音を言えば殲滅した方が手っ取り早かったのだが、下手を打ち過ぎて指名手配になったら後で面倒なので殺さずに痛めつけるに留めたのだ。

その後、自己紹介をして石動が魔法を披露することで別世界からき

た事を信じてもらう事に成功し、その実力と見た目が夫婦の娘と似たような年齢である事を買われて夫婦の娘の護衛に任命されたのだ。

「わかってるわよ。だけどなんで高々護衛の為に身元不明のバカの戸籍偽造したり態々同じ学年に編入までさせるのよ!? 明らかにやり過ぎよ!」

「お、お嬢! あんましそー言うのは大声で言うなって!」

キャンキャンと吼えるお嬢様に進は苦笑しながらも諫めてそして教室まで辿りつく。

「んじゃ、またお昼にでも会いましょう」

「はいはいっ!」

そして時はどこぞの吸血鬼にすっ飛ばされたかのように経過して…
…というのは冗談で、進が授業を居眠りしていると、突如校内放送から悲鳴が聞こえてきた。

そこから先は突然の阿鼻叫喚だ。

何がなんだか理解できないうちにクラスから殆どの人間が飛び出して行った。

「なんだか知らんが、避難訓練が無意味だって思い知らされる瞬間だよな」

等とややピント外れのことを言いつつ携帯電話をいじってお嬢に連絡を取ろうとするが……。

「……出ないな。少しやばいか?」

何がやばいかと言えば、依頼が達成できないと言う事がやばい。

彼にとって依頼とはライフワークの一つ。

ダンジョンに潜り込んで探索したり、人から人外、はたまた神を相

手に戦ったり、時には子守から暗殺までの幅広い依頼をこなしたりするのが彼のライフワークだ。

そして、依頼を受けるからにはキチンと完遂するべきだ。失敗しまったのは最大の屈辱だ。

「しょうがない、探しに行くか」

こうして彼は校舎内でゾンビを殲滅しつつお嬢を探して回るものが見事なすれ違いで会うことは出来ず、遂には校舎内のゾンビを倒し尽くして生存者を数名確保する物のお嬢を見つけられずため息をつくことになる。

助けた中にはシトーを名乗る教員と数名の生徒、更には自身が図書準備室で助け出した春野真紀を名乗るどこかで見たような女子生徒がいるのだが、シトー教諭らとは折り合いが悪かった為、誠実な態度でオハナシ（脅迫）をして彼らと別れ、春野真紀のみが彼に付いて行動する事になった。

なお、彼らと遭遇してグダグダとうるさく言われながらもストーリーキングされつつも無視して探し回ってる隙に彼の探していたお嬢は仲間達と共にバスで既に逃げているというのは余談である。

S u s u m u - I s u r u g i & a m p ; M a k i - H a r u
n o A l i v e d !

I f もしも彼が辿りついた世界が……学園黙示録編（後書き）

学園黙示録、実はアニメで少し見たのとWikiとSSの情報ぐら
いしか知らんとです。

P h a n t a s y S t a rな世界で..**P o r t a b l e**な体験版! (前書き)

最近P S P o 2 I に入れ込んでるので書きたくなった。

続きとか長編化は今のところ考えてない。

ちなみに、P C ナツヤ・アマノは自分が使ってるキャラの名前です。実際にはP C 名は夏優となりますが、グラールではどうも漢字が使われてなさそうなので、姓もあわせてカタカナ表記です。

ちなみに、夏優ってのはネットゲとかで自分が頻繁に使うキャラ名だったり。

一つだけ決めておけば、後で色々考えなくて済むのが楽だよね。自分にも他人にも。

PhantasyStarな世界で..Portableな体験版!

目が覚めると、其処は見知らぬ医務室っぽい匂いがする部屋のベッドの上だった。

「あ...れ...れ?」

体を起こそうとすると、腹部を始め、体の至る所が痛みを訴えかけた。

更に、酒を飲み過ぎた翌日に脱水症状出してる時の様な異常な倦怠感にも襲われた。

だが、その倦怠感も次の瞬間にぶっ飛んだ。

「あ、目が覚めましたか!? ドクター! 患者サンが目覚めましたよー!!!」

特撮のメタルヒーロー物とかに偶に出てくる、顔を含めて全て人工物な感じのロボットな女の子が看護師っぽい格好で俺の目覚めを医者に告げていたのだから。

「直ぐにドクターが来ますから、安静にしておいてくださいねー」

人口物っぽい感じだが、彼女は人間のような雰囲気ですら俺に対応してくれた。

一瞬、怯んで返事を返しそびれそうになるが、氣力を振り絞って返事を返す。

「わかりました」

その後、ドクターが来て、その頃には意識も倦怠感もある程度落ち着き、そして色々と問診が始まった。

そして判ったのが、俺が居る今の場所が、グラール太陽系のGコロニーと言う、ファンタシースターユニバースというゲームの世界に酷似した場所である、と言うことだった。

更にもう一つ判った事がある、それは今の時系列だ。

俺自身はどうやらGコロニーがSEED、ぶっちゃければバケモノ達にコロニーを襲撃された際に、バケモノに襲われ重傷を負い、更に天井の崩落に巻き込まれて死に掛け、そしてガーディアンズというこの世界の星間警察機構に救助されたいらしい。

「……どんだけ運が悪いんだ、俺」

「ハッハッハ、何運が悪いといっても君はこうしてキチンと生きているんだ！これも星霊の導きだろう。本当に運が悪ければ、君はあの事件で命を失っていただろう。あの事件では、本当に多くのヒトの命が失われたからな」

「……そう、ですか。なら、星霊と俺を救ってくれた人たち全てに感謝しなければいけませんね」

一応、ファンタシースターユニバースシリーズはオンラインを含め全てプレイしてきたので単語や世界観はわかる。

だから適当に話を合わせる事も出来る。

「そうだ、あの事件で君は顔面も大きな怪我を負っていてな、一応出来るだけ元の顔に近いよう修復をしたつもりだが、この鏡で自分の顔を見て、違和感がないか聞かせて欲しい」

なんて事を言われて、手鏡に写った俺の顔は、20年以上慣れ親しんできたやや老け顔の普通な顔ではなく、ゲーム、ファンタシー

スターユニバースを始め、その外伝であるポータブル、ポータブル2、インフィニティで利用していたナツヤ・アマノと同じ顔、同じ髪型だった。

その後、気が動転して色々合ったが割愛しよう。
医者にも長い眠りによる意識障害と判断されたし。

そしてあの後、退院間近に迫った俺は行き場を失っていた。

と、言うのも俺が住んでいたというGコロニー居住区はSEED襲来の際に壊滅しまい、今は復旧作業中。

更に学生だったらいいのだが、学校も当然休校状態であり、そして致命的なのが俺が天涯孤独らしいと言うことだ。

と、いうのもどうやらSEED事件より以前に両親を事故で失ってしまったていらしい。

思わず痛み始めた頭を手で押さえてしまったほどだ。

そんな俺に救いの星が舞い降りた。

「どうせだから、ガーディアンズに入ってみてはどうだい？」

「ガーディアンズに？」

「ああ、SEED襲撃事件が起きて以来、グラールの各地でSEED由来の事件が起きるようになったそうだね。それを解決する為に現在ガーディアンズやパルムの同盟軍が広く人員を募集しているんだ。パルムはキャスト至上主義者が多い事を考えると、ヒューマンである君はどちらかと言えばガーディアンズに所属した方が良さだろうと思うが、どうだね？」

この世界には幾つかの種族が存在する。

先ず、普通の人間であるヒューマン、進化して魔法の親和性の高い
テクニク
次代の人間であるニューマン、動物の遺伝子を持つ生命力に富む亜

人間であるビースト、ロボットがヒトとしての人権を得たキャスト。で、キャスト至上主義というのは色々逸話があるのだが、単純に言えば「色々劣る人間たちよりも自分達キャストの方が凄い！」という選民思想の様なモノだ。

とはいえ、キャスト全てが人間を下等と見るかと言えばそうではないので、その辺りは間違えてはいけないポイントだろう。

「そうですね……一度、ガーディアンズに見学に行ってみようと思います」

なお、見学の後にガーディアンズの案内のお姉さんに言葉巧みに流されてしまい、俺がガーディアンズ入りする事となってしまうのだった。

ちなみに、俺の教官はユニバースのエピソード2にてプレイヤーの教官であり、後の相棒であるライア・マルチネスというビーストの女丈夫だった。

彼女の訓練は他の教官と異なつて実技が殆ど実践訓練だった。

具体的にはある程度の銃撃訓練や、魔法の使用訓練、更に格闘の基礎を僅かに学んだぐらいでイキナリ巨大原生生物やSEEED変異体を退治するミッションをやらせる鬼っプリだ。

ビーストの女は怖いって、ユニバースで登場するボル三兄弟が言っていたけど、本当だと思った。

ガーディアンズ入りする為に訓練とミッションをこなしてボチボチ終わらせ、研修の終わりを告げられた日、俺はライアさんに「面白いモノがあるからついて来い」と言われてついていくと、辿り着いた先には一人の女性型キャストと研究員っぽそうな男が居た。

「ヴィヴィアンでス、ヨロシクオネガイシマス」

「と、言う訳だ。お前は今日から当分このGRM社製の新型キャスト、ヴィヴィアンの情緒面と戦闘経験を育成する為のお手伝いだ。戦闘訓練はVR訓練を予定している。訓練に関する事とヴィヴィアンに関する事で気づいた面は毎日レポートに書いて提出しておけ。まあ、お前は見た目よりも優秀だし問題ないだろう？じゃあアタシは行くぞ」

ライアさんはそれだけ言うと言った。サッサと行ってしまった。

その後の事だが、結構きつかったとだけ言って置こう。

ヴィヴィアンは生まれたてのせいか、変なタイミングで突撃したり、コチラをまったくフォローする事ができなかったりと散々な感じだった。

だが、それはあくまで初期の事だ。

慣れてくると戦闘面では目覚ましい活躍を見せるようになった。

俺がフォローに徹する事が多くなったと言う感じもあったが。

更に、嬉しい事に情緒面でも段々と成長していき、年頃の女性のよくな事を言い始めるようになった。

元々見た目の良いヴィヴィアンだけに、そういった彼女の成長は可愛い妹が出来た感じで俺としても微笑ましかった。

「……おいナツヤ。アタシはレポート提出をしろといったのであつて妹育成日記が欲しいと言った覚えはないぞ？」

「……スミマセン」

そんな日々もあったという間に過ぎ、俺がガーディアンズの訓練を終えようと言う時期に、ヴィヴィアンもまた育成期間を終えようとし

ていた。

それは詰まる所、『このヴィヴィアン』との今生の別れを意味していた。

と、いうのもこのヴィヴィアンはプロトタイプなのだ。

プロトタイプは後の正式機の為の布石であり、要が済めば破棄……とは言わないまでも、メモリが抹消される事もあるらしい。

「私、忘れません。アナタと共に成長したこの日々を」

「俺もだ。だから……何れまた会おう」

ヴィヴィアンと共に成長した日々が、俺を一つも二つも成長させてくれた。

「はい！」

だから、俺と共に成長したヴィヴィアンのこの笑顔を、俺はしっかりと覚えておこうと思った。

彼女とまた出会える事を祈りつつ。

P h a n t a s y S t a rな世界で..**P o r t a b l e**な体験版！（後書き）

続きが読んでみたい人は、ワッフルワ（ry ゴホン。とにかく感想を送ってください。

もう少しマシな形にしたP o r t a b l e体験版（本編を執筆してみようかと思っています。

そういや、P o r t a b l eの後はU n i v e r s e E P 2とP o r t b a l e 2って流れなんだよな。

その辺り、どないしようかな……。

いや、どうにでもできるか。

あいとゆうきとゆめとちーとな物語 予告編? (前書き)

執筆活動がうまく行かないのでカッとなってやった。
後悔はしていない。

あいとゆうきとゆめとちーとな物語 予告編？

それは誰かが望んだ物語。

それは誰もが望んだ物語。

歴史にIFを挟む事に意味は無い。

何故なら、過去を変える事はできないからだ。

だが、誰もが一度は思う。

もしも、歴史が変わればどうなるのか？と。

Aという国が本来であれば楽に勝利する筈の戦争が、戦争に”不確定要素”を混ぜる事で経過が変わり、結果さえも変わってしまうことが、あるのではないかと、誰かは考えた。

だが、前述した様に過去を変える事はできない。

”過去でなければ良いのでは”と誰かが言った。

それは未だ結果が出ていない近似相対過去世界、自分達の世界の過去に良く似た別の世界、パラレルワールドであれば、そのIFを見ることが叶う。

そしてまるで”実験室のフラスコ”に試薬を混ぜる様に”IF”が加えられた。

彼らは、それを眺める。

願わくば、より良い未来の可能性を願って。

多くの希望の為に、様々な劇薬とも取れる物を籠めて。

OVERS system ver0.89 booting
now.

其れは全能の代理を徵募せし物言わぬ機構。

Generation System booting now.

其れは異界の英雄を招く。

Garden of Eden Creation Kit booting now.

其れは無より有を生み出す

プレイヤーよ、心せよ。

あなたが得た力は暗き運命を払う魔法の銀の剣であり、あなたと共に在りし者に潤いを与える果実となるだろう。

プレイヤーよ、心せよ。

あなたが得た力は万物を打ち倒し、己自身さえも切り裂く可能性を秘めた諸刃の刃。

願わくば、世界とあなたに幸あらん事を。

願わくば、より多くの人々に幸福な未来を。

これが”この”世界の解答である。

「その答え、YESですね」

これは”あいとゆうき”と”ゆめ”と”ちーと”が織り成す物語である。

あいとゆうきとゆめとちーとな物語 予告編? (後書き)

ぶっちゃければマブラヴ物です。

理想郷で有名な『ちーとしすてむ』を用いた作品をいつか作ってみたいな

なんて思ったりしましたが、設定を追うのも大変なのでネタだけココに投下して放置の予定。

もしかしたら1話ぐらいは続きを作るかも。

セカイは何時だって滅びに向かっていた（前書き）

この短編SSは盛大なイミフで構成されています。

自作他SSのネタバレ的な要素も備えてますが、ぶっちゃけあんまり関係なかったりします。

セカイは何時だって滅びに向かっていた

21世紀になって十数年。

世界は少しずつ破綻し始めていた。

始まりは、とある少年の神隠しと少年少女が交通事故が起きた日から始まる。

その日を境に少年少女が次々と神隠しに、事故に遭い。

また、時には大人さえも事件に巻き込まれた。

そして、次第に事故が更に多発し、それは人心を揺さぶる。

不安が不安を呼び、混乱を来たした人の中には、心に変調を来たして絶望の末に無理心中からなる殺人に手を出す物も現れ始める。

その様子を、悲しげな表情で俯瞰している女性が居た。

格好はまるきり近未来SF系のゲームの女性キャラだった。

「セカイが滅んでいく。私のセカイが……」

彼女は、このセカイを創世した神だった。

彼女が創ったのは『自分の生まれ故郷を模した世界』だった。とはいえ、セカイは彼女が望んだ通りの世界ではなかった。

「何を悲しげに言っているの？滅んでいくのは『君が望んだ』からじゃないか」

何時の間にか現れた黒いシルエットが嘲笑う様に言う。

「滅ぼしたくなかった。なのに、どうして……どうして、私は……」
「だから、君が望んだからじゃないか。『自分の居場所が無いセカイ等要らない』ってさあ」

呆れた様に黒いシルエットが、しかしやはり嘲る様に言う。

そう、セカイに彼女の『居場所』等無かった。

多くの苦難を乗り越え、神となった彼女。

だが、彼女の『故郷』に帰る術は存在せず、神のみが持つ『創世』の力を得てもどうする事もできなかった。

「ああ、コレは本当に悲劇だ！^{キゲキ}なんて泣きたくなる程愉しくて皮肉な悲劇だろう！自分の居場所が欲しかった神の作った世界、しかしそこにも自分の居場所等ありもしなかったとは！」

「こんな力等……得るべきじゃなかった」

彼女が神の力を得た時、彼女は多くの存在が持て余す存在へと昇華されてしまった。

彼女に近しい者たちは嫉妬し、同時にその力を己の物にしたいと思っってしまった。

仲が良かった、或いは微かな恋心さえも抱いていた者ですら、彼女に牙を向いた。

彼女はその現実恐怖し、神の力を以って『無かった事』にした。力を行使した次の瞬間、まるで変わり身したように態度を翻す様はおどましかった。

相手が、何より自分が。

だから、逃げ出した。

そして、自分の、自分の為だけのやさしい世界を作ろうとした。

だが、失敗した。

自分の事さえも信じ切れなかった彼女の心は、世界を作る際に『自分を嫌ってしまった』が故に自分の居場所を作る事に失敗してしまったのだ。

何から何まで自分の世界にそっくりなセカイは、唯一つ、自分の居場所だけが存在しなかった。

その事実彼女の心を蝕み、やがてセカイを綻ばせた。

その綻びは世界の破滅へと繋がってしまった。

気付いた時には最早セカイは取り返しがつかず、最後の手段としてセカイの住人を可能な限り異世界へ逃がすという方法しか取れなかった。

彼女は確かに滅びを一度は望んでしまったとは言え、神であり、そしてこのセカイの総ては自分にとって自分の子供だった。

「結局は偽善さ。独り善がりの独断だね。ああ、なんて醜い足掻きだろう」

シルエットは小莫迦にするように言う。

「でも、それでも私は……」

「ウソつき。本当は初恋のカレが盗られるのが嫌だっただけの癖に。醜い奴、カレがオマエを見たらどう思うんだろうねえ？ 理不尽な存在に不老不死にされた上に異世界送りにされて、親友も恋人も殺されて、カレどう思うのかなあ？ ああ、そういえばその親友はオマエの妹だった！ だけどこのセカイでは何故か男だったねえ？ 何でだろうねえ？」

ケヒヤヒヤヒヤと下品に笑いながらシルエットは彼女の周りを

腹を抱えながら歩く。

全ては自分の嫉妬が世界を歪めた結果だった。

「うう……うう……！」

彼女は涙を浮かべながら唸る。

全てが事実だった。

セカイは彼女が思っただけで『変化』する。

「ああ、ほら！まただ！今度はカレのお兄さんかい？その前は自分の母親と姉の模造品を狂わせた上で異世界送りだった！」

シルエットが態々その光景の映像を投影する。

投影された映像には彼女に似た存在が、スーツ姿の青年を異世界送りにする姿が映っていた。

「助けて……助けてよ……」

セカイは滅んでゆく。

彼女の心が壊れていくのと同じ速度で。

だけど、彼女を助けてくれる存在はいない。

彼女に触れる事が、声を掛ける事ができる存在がいらない。

「もう何か考えるだけ無駄さ。全て忘れて楽になっけしなよ」
「……………」

シルエットの語りかける甘言も嘲りも果たして彼女に届いているかは不明だ。

このセカイは何時だって滅びに向かっていた。

このセカイが創生されるその前から。

何時か、彼女^{セカイ}を救ってくれるヒーローの存在を夢見ながら静かに、
確かに……。○

セカイは何時だって滅びに向かっていた（後書き）

と、言う訳でカミさまのネタバレでした。

でもぶっちゃけ他のSSにあんま関係しません。

原因ではあるけれど、別枠の話なので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0879m/>

なつやのSS短編集

2011年6月3日00時58分発行